

連鎖と交差

——初期デリダ研究——

Comment interpréter l'histoire d'un exemple qui permet de ré-inscrire, à même le corps d'une singularité irremplaçable, pour la donner ainsi à remarquer, la structure universelle d'une loi? (MA, p.49) — Derrida

立花 史

今日、デリダの哲学が、ハイデガーの「存在の思考」に大きな影響を受けており、デリダ自身、好んでハイデガーのテキストを多く取り上げていることはよく知られている。また彼が、“理論”的にも“実践”的にもエクリチュールに定位して思索を展開してきたことも周知の通りである。一方で、デリダは、意味論的現前性をもっとも純粋な形で保証するものとされてきたパロールに対して、実は、その代補物ではなく意味論的現前性の「下部構造」¹⁾でさえあるものとして、エクリチュールの役割とその機能様態を理論的に明らかにした。他方で、デリダの哲学的実践の場そのものが、彼独自の歴史的射程から見て、大きなエポックをなすと考えられる重要なテキストの読解によって行われた。階層化された二項対立を単に転倒するだけでなく、そうした階層化を可能にしながら同時に、上位と下位を不可避な形で絡み合わせている構造を見極めること、そしてそうした試み自体を、テキストの均質な理念的現前の決定的な不可能性を跡付けることによって行うこと、それこそが当初から脱構築と呼ばれるものであった。その過程で、痕跡、名、記号、表象、署名といった概念が、存在論的な含意とともにデリダの鍵語となっていく。こうしたデリダ認識は今や別段めずらしいものではない。しかし存在論と記号論とは必ずしも折り合いのよいものではない。なぜなら、デリダが論じるハイデガーの存在は、存在者一般の根源に関わる“単一”の局面であるのに対して、記号の意味論的同一性

の局面では複数性を考慮せざるをえないからである。言語と存在の関係がハイデガーとは異質であるだけに一層この問題は看過できない。そこで我々は、デリダの初期のテキスト（60年代から74年まで）に依拠しつつ、第1節において、デリダが存在論的局面にどのような工夫を凝らしているのかを検討し、第2節において、その工夫の上で、存在者的な局面で、複数性がどう記述されるのかを確認し、第3節では複数性を考慮したその構造を記号論的あるいは言語的な局面で掘り下げられている様子を論ずる。最後に結論において、本稿で素描する複数の差延の交差モデルを、デリダ自身の語る形象の中で確認する予定である。

存在論と記号論

記号論的局面と存在論的局面の異質性を考えるに当たって、まずデリダがどのように両局面を重ね合わせてきたのか確認することから始めよう。VPの独創的な点は、現象学的還元を、表現と指標との「本質的諸区別」の上に重ね合わせて考えたことである（この視点に対する是非はここでは触れない）。デリダは、フッサールの『論理学研究』第一部の「本質的諸区別」において、表現と指標との必然的な「絡み合い」を確認し、そこに記号の反覆可能性を見出す。しかし反覆可能性が厳密に規定されるためには、その境位自体の存在様態もまた同定されねばならない。そのためにデリダは、およそ意識への現前一般を可能にする「瞬間」そのものが差延されていることを示すべく、フッサールの『内的時間意識の現象学』（以下『時間講義』）における「過去把持」と「原印象」の絡み合いを検討している。デリダは、フッサールの記述に沿いつつ、原印象と過去把持がお互いに異質であるにもかかわらず分離不可能な統一体をなすような、「弁証法」的關係を指摘する。『時間講義』の構想は、今と今ならざるものとの原初的差異として理解されねばならず、原印象と過去把持との間の還元不可能な結びつきは、今がその出現の瞬間からしてすでに、今ならざるものの他者性（例えば「過去把持的痕跡」）に取り憑かれているのである。従って、現在の現前性は反覆可能性から考えざるを得ない。この可能性は、「生きることを差延に向かって開放し、体験の純粹な内在性の中に、指標的伝達の、

いやそれどころか記号作用一般の隔たりを構成するもの」である。記号と現前性一般が、ともに、「無際限な反復可能性の相関者」としての「アイデア性」(VP, p.102)を帯びていることが明らかになる。フッサールが痕跡と現前との解きほぐしがたさに或る程度気づいていたとデリダは考えているが、それにしてもなぜ、この絡み合いを真正面から扱うことができなかつたのだろうか。デリダによれば、実はそれはフッサールの理論構成そのものに内在する問題であった。彼にとって、現象学は、対象から、前＝表現的な意味層を、概念的かつ普遍的形式のアイデア性へと昇華するプロセスを記述するものである。そうである以上、指標よりは表現が、表現よりはアイデア性の直接的な自己現前が一つのテロスとして暗黙のうちに要請されてしまう²⁾。この理論構成の中では、現象学的還元と「本質的諸区別」は、フッサールの同じ目的論的所作なのである。さらにフッサールの「純粹論理文法」そのものが、「テオレイン」という観点に立脚するために、その慎重な手つきにも関わらず、最終的には「指標作用のテオリアの本質の核を、純粹なテオリア的な表現性そのものから排除する」ことになってゆく。言語表現の中に直観の充実を重ね合わせたために、ともすると言語論的転回以前の理論構成にもみまがうものになってしまうのである。従って、デリダが強調するのは、フッサールが捕らえ損ねたと考える、現前性一般の指標的特性であり、彼はそれを「痕跡」「原エクリチュール」とVPの中で呼んでいる。

ところで、フッサールにおける、現象を忠実に記述する現象学と目的論の相容れなさは、VPでは差延や原エクリチュールの議論を導く過程で述べられているが、実はPGにおいてすでに論じられていた。デリダは、ハイデガーとフッサールを比較した上で、後者が目的論的な態度に囚われたままである理由に、「フッサールが存在論的なものに到達しないのは、フッサールが存在者から出発する」(PG, p.129)ことを挙げている。存在者が対象として立ち現れるという事態から出発して考えるかぎり、フッサールの思考は制限されざるをえない。では存在者から出発しないハイデガーの態度とはどのようなものか。

周知の通り、ハイデガーは、1962年の講演「時間と存在」において、西欧形而上学が暗々裏に前提としてきた、存在を「恒常的現前性」とする存在規定を指摘し、存在概念と時間概念の通俗的な共犯関係を明るみに出し、「本来的時

間性」の観点から、とりわけ現存在に定位して存在様態の解明を行った。やがて彼は、「転回」によって、存在者を介さずに存在そのものの運動を語るようになる。そのとき、「合致としての真理」を可能にする現前性の開けとしての「真理」が議論の前景に上ってくる。現前的存在者一般に「先行」しつつ、それらに現前性を、その固有性を与える「贈与」の運動が、「性起」Ereignisと呼ばれる。この運動がはらむ、先行／事後の関係は、デリダも指摘する通り、「存在の問題〈より以前〉のこのes gibtの動き、こう言ってよければ贈与のこの動き、存在の贈与のこの動きにおいて問題にされているのは、ハイデガーが的確に明示しているように、その動きの方が時間的に存在の問題よりもっと以前であるとか、存在の問題は論理的にその動きに依存しているとか、そういうことではな」く、同じ一つの運動である（そして「この動き、このはみ出しが、差延を語ることによって私が試みたはみ出しに類似している」(LA, p.270)と述べている)。事実、ハイデガー自身、「時間と存在」で次のように述べる。

性起における固有なことは、性起はそのもっとも固有なものを、際限ない露見から引き離すということである。このことを性起させることの方から考えるならば、性起は上述のような意味で、自分自身を脱性起させるということの意味する。性起としての性起には脱性起が属している。そのような脱性起によって、性起はそれ自身を放棄するのではなく、むしろみずから固有の所有を保守するのである。⁽³⁾

「性起」はそれ自身の「脱性起」であり、逆説的にはあるが、「脱性起」こそが「性起」の固有性である。ここにおいて、現前性の最深の「根源」を探求する「存在の思考」は、解消し得ない謎に突き当たらざるを得ない。現前性の「根源」である「性起」の運動そのものは、現前性を贈与し、送り届け、成立させる動きである以上、現前性からは「常にすでに」抜け去っている⁽⁴⁾。この抜け去りは、贈与されたものにおいては完了してしまっている。GRでデリダが「絶対的過去」⁽⁵⁾の名の下に論じているのも、この抜け去りである。彼にとって、それは、現前することなく、現前性の下部構造として、「〈常に＝すでに＝そこに〉」としてしか語り得ない「ある過去」である。「ある過去、〈常に＝すでに＝そこに〉は、根源のいかなる再現動化もそれを十全に制御できず、またそれを十全に現前性へと呼び覚ますことのできない、そういうものであ」

り、「一つの根源的現前性の明証性を絶対的に蘇らせることができないということは、「絶対的な過去」へと回付する。このことゆえに、我々は、一つの現在の単一性の中に凝縮されないようなものを痕跡と呼ぶことができる」のである（GR, p.97）。ここでデリダは、この痕跡に過去把持と同時に、予持、ある種の先取りをも同じ痕跡の資格に含めることはできないのだろうか、と自問した後、その考えを退けている。というのもまず先取りは、〈常に＝すでに＝そこに〉の還元不可能性を抹消することになりかねないからであり、さらに痕跡が回付する絶対的過去は、過ぎ去った現在のように、様態変化した現前性の形式においては理解しえないからである。「過去が常に過ぎ去った現在を意味したのなら、痕跡の中に引き留められる（把持される）絶対的過去は、厳密に言って、もはや「過去」の名に値しない。これは、存在と同じく×で抹消されるべきもう一つの名である。この奇妙な運動は、差延が差延するということを想起させるのと同程度に告知するがゆえに、その名は一層抹消されるべきなのである」（GR, p.97）。絶対的過去を引き留める痕跡が「奇妙な運動」と言われていることは、上述のハイデガーの引用に立ち戻って考えるとよく理解できる。存在の贈与が、性起の運動であると同時に、その運動の固有性として脱性起をそのつど同時に引き起こしているのだとするなら、脱性起の抜け去りはなるほど、〈常に＝すでに＝そこに〉という絶対的過去における「痕跡」であるが、しかしそれが運動でもあるのは明らかである。痕跡とは、常にすでに生じている痕跡化そのものなのである。しかも痕跡の運動は、差延が中動相の差異化の運動であることを考えれば、「自己触発」としての自己痕跡化でもある（今後は、こうした動的側面を含意した上で「痕跡」という語を用いる）。

デリダは、『時間講義』の分析において、「現在の現前性は、再帰の襲から、反覆の運動から出発して考えられているのであって、その反対ではない。（…）この痕跡ないしこの差延は常に現前性よりも古くて、むしろそれが現前性に路をひらいてやるのだ」（VP, p.127）と主張していた。対象に含まれた前表現層の意味を、普遍的形式のイデア性へと結実させるそうした意識の明証性の場を前提とした認識論的な構成においては、常に現前の場とそこに現前する存在者から出発せざるをえないからだ。デリダがその問題点を指摘し、ハイデガーの「存在の思考」から汲み取ったのは、現前性の場に存在を贈与する運動が、そ

の裏面として常にすでに「抜け去り」という「痕跡」を生じさせているという点であった。目的論的な視座からはこの抜け去りの事態そのものが抜け去らざるを得ないのである。自己触発としての痕跡の運動が抜け去り、現前性の場に存在が贈与されるのだが、その贈与は、まさにこの抜け去りによって固有性を奪われたものでしかない。従って存在者もまた別の意味で「痕跡」たらざるをえないのであり、デリダはこれを、テキスト論に定位した文脈で、「痕跡の抹消の痕跡」(MP, p.25)と呼んでいる。反覆と再帰の運動がまさに記号のイデア性の特徴であること、並びに、そのイデア性が他の記号との差異によって規定されることを受け入れるならば、「痕跡の抹消の痕跡」の発見は、「現前者は或る一般化された回付構造 (structure de renvoi) における一つの機能とな」る。デリダによれば、フッサールの時間論は、現前性が、痕跡の絶えざる運動によって、過去把持の指標と予持の指標との差異において現在という現前者を現前させる回付構造をなす。痕跡化の運動を、同時に「標記 (marque)」の回付構造として語りながら、彼は、存在論と記号論とを架橋しようと試みていると言えよう。

差延とは次のような事態を生じさせる。すなわち、「現在 (現前者)」と呼ばれる各要素が、現前性の場面に現れて、その要素それ自身とは別のものに関連をもち、おのれのうちに過去の要素の標記を保蔵し、未来的要素へのおのれの関係の標記によってすでに穿たれている時、その時にのみ、意義作用の運動が可能になる、という事態を、つまり痕跡が、未来と呼ばれるものと過去と呼ばれるものとの関係し、自分自身ではないもの、つまり絶対に自分自身ではなく、様態変化した現在としての過去や未来でさえないものへのおのれの関係によって現在と呼ばれるものを構成するような時、その時にのみ、意義作用の運動が可能になる、という事態を生じさせるのである。(MP, p.13)

現在の現前が立て続けに抜け去りを經由しているということは、それが過去の要素と未来的要素とからの差異としてのみ現前可能だということである。VPにおいて存在と記号の両方にイデア性を見出したデリダは、現在の現前性が必然的に孕むイデア性もまた、記号のイデア性と同じく「意義作用」として語っている。この意味において、存在論にまで一般化された回付構造が、意義

作用を可能にしているのである⁶⁾。注意すべきは、デリダが記号論を単純に存在論化しているのでもなければ、一見そう見えるように記号論の見地から存在論を再定式化しているのでもないということだ。もし後者として理解するならば、存在論的局面から意識の明証性までを保証する回付構造は、それをそれとして認識するメタ主体を要請してしまう⁷⁾。しかし、すでに見たように、痕跡の運動が自己触発であるかぎりにおいて、一般化された回付構造はまた自動的な回付作用でもある。それは、弁別システムとして常になんらかの主体の視座の中で稼動しうるものではなく、主体に先立ち、時間の運動によって、時間の運動そのものとして、常にすでに自動的に回付したのものとしてのみ立ち現れる。なるほど、デリダは存在論の再定式化に記号論的回付構造を用いているが、しかしこの記号論的回付構造そのものは、一般化された自動的な回付構造から出発してのみ可能になっているのである。以上が、ハイデガーと構造主義との狭間で練り上げられた当初の「差延」であったと考えられる。次に、存在論と記号論を独特の仕方で融合したデリダの概念装置の射程を測ってみよう。

諸単位の連鎖

前節で我々は、デリダが、ハイデガーの「存在の思考」や構造主義の記号論から、「一般化された回付構造」を導き出したことを述べた。POでは、この回付構造は、差延の第一の定義として「エコノミーの最も一般的な構造」(PO, p.17)と呼ばれている。差延の第二の意味は、「我々の言語にメリハリをつける概念の諸対立、つまり感性的／知性的、直観／意義、自然／文化などの共通の根」とされ、第三の意味では、「諸差異、弁別性の産出」であり、ソーシャルや構造主義諸科学における「意味や構造そのものの条件」(PO, p.17-18)とされている。しかし第一の意味と、第二、第三の意味とはどう関係するのだろうか。存在論的回付構造から記号論的回付構造はどのように導き出されるのだろうか。差延が弁別システムの産出であるということを考察するために、GRの第二章を参照する必要がある。

一方では、いわゆる感覚的なものである音素的要素や項や、感覚的充実とされるも

のは、それらに形式を与える諸差異なしには、そのものとして現われなかったであろう。これが、音声実体を還元して差異に訴えることの射程である。さて、ここで、差異の現われと機能様態は、いかなる絶対的な単一性にも先行されない或る原初の総合を前提とする。従って、これが原初的な痕跡であろう。時間的経験の最小限の単位における過去把持 (rétenion) がなければ、同じものの中で他者を他者として留め置く (retient) 痕跡がなければ、いかなる差異もいかなる意味も現われまいだろう。だからここでは、構成された差異ではなく、あらゆる内容規定以前に、差異を産出する純粋な運動が重要なのである。(GR, p.91-92)

ここでは、存在論的回付構造から語り起こして、シニフィアン同士の差異の問題が語られている。なるほど、この回付構造を通じて、現前性の場における存在者たちが反覆可能な同一性として構成されることはすでに見た。しかし、そこで構成されるのは、時間的に差異付けられた同一性であるだけではない。と言うよりもむしろ、それが同一性であるかぎりにおいて、何らかの「形式」を帯びるのである。「形式とは現前性そのものである」とさえデリダは指摘している (MP, p.188)。そして存在者が形式を持つということ、形式的に差異付けられているということ、それは、この存在論的回付構造が、時間的差異や存在論的差異だけでなく、存在者同士の差異をも同時に構成するということである。現前性の場とそれ以外のものの存在様態の相違がここにある。我々が、一瞬一瞬に「現在」としてとらえる存在者は、存在論的回付構造によってそのつど、時間的に連続的に回付されているにすぎない。しかし他の存在者の現れは、それが現前の場に自らの位置と形式を与えられるかぎりにおいて、その存在者ともう一つの存在者の現れ或いは不在なのである。従って存在者の現われは常に、存在者の連鎖か、あるいは連鎖の不在という連鎖を伴っている。およそ連鎖に一切関与しない存在者はない。それゆえ、こうした存在者同士の差異と連鎖を産出する運動としての差延は、弁別システムをも産出するのである。「諸差異が、諸要素の間で現われるというよりむしろ、諸差異が諸要素を産出し、諸要素をそのものとして浮かび上がらせ、諸テキストを、つまり痕跡の諸連鎖 (chaînes) や諸システムを構成する」(p.95)。無論、物理的存在者と記号的存在者では、諸差異の機能様態は確かに異なる。しかしこの差延の運動が、「同じ可能性の中で同時に、時間化、他者への関係、言語を開始」し、「言語体

系の条件」となっている (GR, p.88)。かくして存在論的回付構造に従って現前性の場が開け、その中で「世界という戯れ (*jeu du monde*)」⁽⁸⁾ (GR, p.73) をなす存在者の回付構造が分節される。そしてそれと不可分な形で、シニフィアンの回付構造の可能性が構成される。同じGR第2章において、デリダは、ヤコブソンが心理主義と批判するソシユールのシニフィアン概念を救うべく「フッサールの修正」(GR, p.94)を施しているのは、一般化された回付構造の観点から、シニフィアン＝聴覚映像が含む痕跡としてのステータスを再確認するためである。聴覚映像は、ヒュレー／モルフェー構造によって、実的構成要素を介して我々に与えられるが、しかし当の聴覚映像をシニフィアンとして理解させるその内実は、ノエマの意味のように「体験の非実的構成要素」であり内在において超越しているのである。「心的刻跡 (*empreinte psychique*)」としてのシニフィアンは、実際に聞かれた音声と想像された音との対立の彼岸にあり、聴覚映像の志向的構成物の位相に属する⁽⁹⁾。もちろんデリダは、こうした超越論的現象学の枠組みには留保を表明しており、現象学的枠組みでソシユールを再解釈することが目的なのではない。むしろノエマの超越論的な志向的構成⁽¹⁰⁾を引き合いに出すことによって、「音の現われの構造 (*structure de l'apparaître du son*)」(GR, p.93)の常にすでに構成された位相を浮き彫りにしている⁽¹¹⁾。

前節で我々は、存在の贈与の絶え間ない先送りの運動を、デリダが存在論的回付構造と見なしていることは述べた。この回付構造はなるほど、記号論的回付構造の一般化ではあるが、しかしそれが時間の運動に拡張される限りにおいて、時間の線状性によって一方向にのみ回付する、限定的なものであった。従って、本節で見たように、記号論的局面において初めて、回付構造がその名にふさわしいステータスを得るのであり、そしてその全方位的な連鎖の可能性は、存在者の局面が、現前性という諸形式、またその限りにおける諸差異を呈示する局面であることを踏まえてようやく明らかにされるのである。ただし我々の観点から、GRにおいて扱われているのはここまでである。GRの意図は、その名の通り、パロールとエクリチュールとの関係、弁別システムとしての言語など、言語学の中でも痕跡としてのグランメーに関わる部分が前景に据えられており、記号論的回付構造の中核をなす意味論的単位に関する分析にはそれほど立ち入った記述はない。またソシユールの講義からは、連辞、文、そしてそれよ

りさらに大きな単位における意味はさほど扱われておらず、デリダもまた扱ってはいない。こうした問題は、ともに1972年刊行のDIやMPにおいて積極的に論じられることになる。

コードの権威の崩壊

デリダは、語の統語論的使用以前に意味が実質的に語に宿っているとする言語観を、「意味論優位」の言語観と見なし、それに対して彼は、VPで現在の現前性について行ったように、「再帰の襞から、反覆の運動から出発して」、独自のエクリチュール概念を梃子に言語思想を打ち立てている。そのとき、とりわけ彼が目にしたのは、「言語の形式化の力」(DI, p.274)に深く関わる隠喩の形成の場面である。GRの場合、シニフィアンの弁別システムにおいて、単位の反覆可能性がいかにか弁別性と交差するかという局面が論じられたが、「白けた神話」に代表される隠喩論では、シニフィアンを「下部構造」としたテキストにおいて、シニフィエ同士の回付によって意味論の単位の同一性が、どのように構成されるかを統語論との関係から論じている。

1978年発表の「隠喩の引退」の中で彼は、リクルールの誤解を訂しながら、自分は名詞や単語の特権性を一貫してしつこく検討しており、「こうした優位に対して、私は統語論のモチーフを対比させることを常としてきたが、このモチーフは「白けた神話」において主要なものである」(PS1, p.73)と語っている。事実、「白けた神話」では、最後の数ページ(MP, p.317-323)が、隠喩の複数性と統語論の問題に割かれている。隠喩的なるものは、主題の現前に尽きないテキストを生み出す。デリダに拠ると、隠喩的なるものは統語論を縮減するのではなくそこに自らの隔たりを配置することで自己超出する。隠喩的なるものが自分自身でありうるのは、自らを抹消することによってのみである。こうした隠喩的なるものは、自己解体的性格ゆえに、そもそものはじめから複数的なのである。隠喩の自己解体は、「統語論的抵抗の代補、つまり意味論的なもの」と統語論的なものとの対立を、そしてとりわけ後者を前者に従属させる哲学的ヒエラルキーを失敗に導くもの全て」(MP, p.323)に関わる。では、隠喩にとどまらず、意味の同一性と差異は、「この統語論的抵抗の代補」は具体的にど

のように記述されうるのか。デリダは、DIの「二重の会」において、hymenという語が、結婚の神ヒュメナイオスに由来する「婚姻」の意味と、解剖学用語での「処女膜」の意味との、開けの意味と閉じの意味との奇妙な兼用法 (syllepse) を持つという事実に注目している。ただしこの語を、彼が読解上利用する操作概念のように受け取るとすれば、この論文の企てを中和化することになってしまうだろう。なぜなら、語に固有の意味こそがこのテキスト読解において焦点となっているからだ。デリダは、この散文詩の記述する絶対過去性や、hymenが持つ意味の「決定不可能性」を論じた後、「我々が抱く文献学や語源学への関心は付随的なものにすぎない」と主張し、次のように続ける。

hymenの効果が生み出されるのは、第一にentreを配置する統語論によってであり、宙づりがもはや語の位置だけに由来し、語の内容には由来しないようにentreを配置する統語論によってである。hymenによって、我々はentreという語の位置がすでに標記しているものを再標記するだけであり、たとえhymenが現れなくともこの語の位置が標記しているであろうものを、再標記するだけである。hymenが「結婚」または「犯罪」、「同一」または「差異」などによって置き換えられるとしても、効果は同じであろう。それゆえ（・・・）entreから出発してhymenを規定しなければならないのであって、その逆ではない。テキストにおけるhymen（犯罪、性行為、近親相姦、自殺、模造）は、この不決定の切っ先によって記入される。この切っ先は、意味論的なものに対する統語論的なものの還元不可能な過剰に従って進行する。entreという語は、それ自体では如何なる十全な意味も持たない。開かれたentreは、統語論的な楔であり、自足の名辞 (catégorème) ではなく共陳述辞 (syncatégorème) であり、中世からフッサールの『論理学研究』まで、哲学者たちが不完全な意味作用と呼んでいるものである。hymenに当てはまるものは、必要な変更を加えれば、パルマコンや代補や差延や何らかの他のもののように、二重で相反する決定不可能な価値をもつあらゆる記号に当てはまる。（・・・）統語論による或る記号の構成や解体は、内部か外部かという二者択一を無効にする。我々が相手にしているのは、単に、大なり小なり稼働中の統語論的諸単位や凝縮のエコノミー的差異であるにすぎない。(DI, p.272)

引用を読めば、デリダの主張が、意味論的なものと統語論的なものとの対立を単に相対化するといったことではないのがよくわかる。意味論的単位が反覆可能なものであるとするなら、意味を反覆させる契機は「統語論的楔」である。

意味論的地平の差延とは、常にこの「楔」に規定された統語論的配置の効果による。多義性が、すでに決定され充実した諸単位による意味論的な豊穡さとして理解されるのに対し、デリダの観点では、*hymen*という語の意味は、統語論の効果であるかぎりにおいて、「意味論的空虚 (vide sémantique)」(DI, p.274)なのである。そのつど「楔」によって齎される統語論的な組み合わせによって、絶えず意味論的単位が一般化され解体されると同時に再標記される、そうした運動である⁽¹²⁾。だからこそ、語群は、このとき意味論的単位であるよりも、統語論的一要素つまり「稼働中の統語論的単位」でさえある。ある名詞が統語論的単位となるのは、まさにそれが文の要素として機能しているときだけであり、またそのときのみ、その統語論配置の効果として、意味論的単位も再標記される。端的に言えば、「楔」を軸に配置されたテキストが下部構造となり、シニフィアン同士が互いに差異化し合って、己れのシニフィエを刷新するのである。つまり各シニフィアンに付着した既成のシニフィエ同士が衝突し合い、互いが互いのコンテキストとなって差異付けを行うことで反覆可能な同一性が構成される。ここでもまた、反覆可能な同一性の産出は、それが一つの形式である限りにおいて、同一性同士の差異の産出でもあり、同一性同士の連鎖の産出でもある。

しかし同時に、統語論による一般化が新たに始まることが可能であるためには、諸単位が、さまざまな意味を再標記されざるをえないし、常にすでにそれが生じてしまっている。統語論的要素でさえ例外ではない。その端的な例としてデリダは機能語つまり「共陳述辞」の事例を挙げている。共陳述辞という専ら統語論的要素と思われていた*entre*も、その機能とともに、まさにその統語論的な位置によって、共陳述辞の「意味論的空虚」を再標記され、内容語ではない機能語としての意味を帯びざるをえない。『ヘブライ文法要綱』のスピノザが、*entre*を複数形にしたヘブライ語の例を指摘しているように (DI, p.274)。この*entre*は、「意味論的空虚」の再標記によって、「純粹に統語論的なものでもなく、純粹に意味論的なものでもなく、この対立そのものの明確な開始を標記する」とデリダは述べている。従って、特定の統語論的配置によるテキストが下部構造であるかぎりにおいて、共陳述辞もまた当初は下部構造的な役割を担っていたのだが、同時にそれがテキストの一部であるかぎりにおいて意味を再標

記されざるをえない。しかしだからといって、デリダがここで、単純に意味論と統語論との区別を撤廃しようとしていると読むべきではないだろう⁽¹³⁾。entreが己れの意味を再標記されるということは、我々にとってentreの用法が意味論的にも現前しており我々がこの語を使用することができるということを意味している。機能語は、「統語論の可能性を意味として持つ」(DI, p.274)。従って、自足的名辞は、原理的に、共陳述辞のような統語論的単位になりうるがゆえに何かを意味することが可能なのであり、共陳述辞は意味を再標記されうるがゆえに統語論的な「楔」であることが可能なのである。こうした諸可能性のゆえに、意味論と統語論の区別を我々が行うことができるのである。言語的差延が意味論的同一性の可能性でありかつ不可能性であるということは、この文脈では、意味論と統語論の区別可能性でありかつ区別不可能性であるということでもある。

以上が、言語使用における意味論と統語論の関係であるとするなら、その可能な帰結として次のような場合も引き出しうるだろう。(1)共陳述辞は原理的には語彙化可能であること(スピノザの指摘)、(2)自足的名辞が原理的には「文文化」⁽¹⁴⁾可能であること。また(3)「類推」や「再解釈」によって統語論そのものの変形が生じうること。つまり「二重の会」が示唆するのは、このようにテキストという下部構造がさまざまな意味の変動や、ときには統語論そのものの変形を、さまざまな形で発生させうるということである。ここから、さらにデリダの思索を先取りすれば、次のようにも言える。語において一定の意味の形式が生起するということは、同時に形式同士の諸差異の設定でもある以上、そこでは語同士が地と図のように代替可能な関係をなし、各々の語がそれぞれ互いに他の語の統語論的コンテクストを構成する(ただしコンテクストとなる語たちもまた再標記される以上、厳密にはコンテクストとさえ言えないのだが)。意味論的再標記を施されうる統語論的単位の大きさは、権利上は無際限である。一語、連辞、一文、文章からさらに様々な全体性に至るまで、そのつど自らのコンテクストにおいて意味論的空虚を再標記される可能性に晒されている。ただしいうまでもなく、語、連辞、文、文章という順番でボトムアップに意味が決定されるわけではない。デリダが「あらゆるテキスト同様、「プラトン」の名を冠したテキストも、少なくとも潜在的、動的、側面的な仕方

ギリシャ語のシステムをなす総ての語と関係を持っていなかったはずがない」(DI, p.161) と言うように、一定の文章のブロックもまた言語体系の全体と想定されるものの中にあり、お互いがお互いにとってコンテクストなきコンテクストをなすのである。こうして一言語が、常に己れの各単位を反覆可能的に差異化されているかぎり、どの単位にも意味の充実は達成されず、意味の固定も生じない。「意味論的空虚」のために意味は常に散種⁽¹⁵⁾され、一言語の全体もまた、決して一つのものとしては充実しえないのである。ここからMAにおける「アンチノミー」が帰結する。すなわち、「人は決してたった一つの言語しか話さない」が同時に、「人は決してたった一つの言語を話すことはない」(MA, p.21)。

ところで、言語は既得の諸単位だけで回付するわけではない。廃れてゆく単位もあれば、新たに採用される単位もある。言語的差延は、フッサールが「文法性」と呼んだものの内部を大きく超出してゆくのである。その点を確認するために、MP所収の「署名・出来事・コンテクスト」を参照しよう。オースティンの言語行為論の脱構築を試みるこの論文で、デリダは、痕跡が痕跡であるかぎり抹消可能であり、そのつどの使用において新たな意味を再標記されることを示すために、フッサールの事例に即して、指示対象の不在とシニフィエの不在の局面を分析している。(a) 数学的シンボルの場合と (b) 客観的な意義作用が欠如する場合は、たとえシニフィエの不在でありえたとしても意味の不在ではないことは容易にわかる。では (c) 無意味性ないし無文法性の場合はどうか。“le vert et ou” や “abracadabra” がそれに当たる。これはフッサールの「純粹論理文法」からすれば言語に属さない。つまり認識を与える言語ではない。しかしデリダによると、だからといって、他のコンテクストでシニフィエ的標記の資格を得ることまでは排除できない。例えばこれは、フランス語では “le vert est où?” と同音であり、意味を持ちうる。また、そういう偶発的な可能性がなくとも、現に我々が議論を進めているこのコンテクストにおいては、非文法性の事例として少なくとも意味を持ちえているのである。デリダによれば、通常言語と寄生的言語の区別がないように、使用と言及との区別も原理的には存在しない。あらゆる標記は、それが反覆可能であるかぎりにおいて、引用可能なのである。従ってこの論文の狙いに、「諸規則の有限なシステ

ムとしてのコードの権威の最終的な崩壊」(MP, p.375)があるのは当然である。諸規則の体系としてのコードが、そのつどの使用の中で反覆可能な同一性を得るものであってみれば、それはそのつどは有限であるにせよ、無限に差延されてゆく。「有限な差延は無限である」(VP, p.114)と言われる通り、有限な存在者をそのつど回付的に現前させながら無限に差異化する。この可能性は、既成の統語論や既得の語彙の枠組みをも超えて拡張されうるのである。これが「諸規則の有限な体系としてのコードの権威の最終的崩壊」である。ただしこれはもちろん、「コードの権威」の破壊であってコードそのものの破壊ではない。この権威の破壊とは、言語使用の最終的かつ絶対的規定という意味でのコードが完全には成立しないということである。こうした意味でコードの権威が破壊されるということ、それは意思疎通という意味でのコミュニケーションの可能性の条件でありかつまた不可能性の条件ともなっているのである。

本稿で述べてきた言語的差延の「形式化の力」とは、MPの言葉で言えば「コンテキストから断絶する力」(MP, p.377)であり、つまり、「その機能様態のあらゆる可能性を失わせることなく、書かれた連辞を、それがとらえられ与えられている連鎖(enchaînement)の中から取り出すことができる」ということである。意味論的単位が現前する限りにおいてそれは諸形式と諸差異を産出する。コードやコンテキストは、この「連鎖」の効果であり、「コードの権威の破壊」とは、この連鎖そのものが、そのつどの言語的諸単位の使用を通じて、同一性を書き換えてゆくような事態である。ソシユールや構造主義言語学から借りられた記号論的回付は、あくまで静的な構造にすぎない。デリダの論じる回付は、存在の贈与という運動でありかつ構造をなすものに裏打ちされて始めて稼動する。とは言えデリダは、記号論的回付が存在論的回付の純然たる帰結だとか、その帰結を汚染する不純さが偶然的なものだと見なしているわけではない。例えば、1974年刊行のGL (p.126-137)では、ソシユール言語学をGRとは別の角度から批判的に検討している。ソシユールは、言語体系においては通常のシニフィアンを、「動機抜け(démotivation)」した必然的で自然的なものを見なし、擬音語を、再動機付けされた偶然の産物と見なしているため、動機付けと恣意性、自然と措定といった二項対立に回収されている。これでは、恣意性が自然であることになり、しかもその恣意性の内部で、シニフィアン同士

の示差的関係という「相対的動機付け」が容認されるという二重の矛盾に陥ってしまう。「均質な領域における二つの相対立する力（動機付け／非動機付け）の単純な二者択一では、各々の力の内部にあるずれを含んだ分割を説明できない」（GL, p.136）のである（この問題は、シニフィアンの「コンテクストから断絶する力」にも拘束や方向付けを考慮させることになるはずである）。ここでデリダは、「抑圧の論理のたぐい」を援用する必要性を示唆するが、同時に精神分析では解決できないことも明言している。たとえ言語の可能性が主体や意識に先立つと仮に認めたとしても、言語が人間の機能や能力に拘束されることは言うまでもない。「抑圧の論理のたぐい」の必要性を説くデリダは、言語を、存在論的回付による帰結に還元せず、人間の思考や情動や身体性と交差するものとして思考する方向性を仄めかしている。痕跡や差延が、超越論的なものと経験的なものの感染の諸様態、イデア性と非イデア性との諸差異であり、固有性や「そのもの」性を欠いたもの（MP, p.27）である以上、ひとたび定式化された差延構造が、より具体的な記述の可能性へと開かれるのは、しかるべき帰結であろう。

結論に代えて——交差モデル

従来のデリダ解釈においては、アメリカの脱構築批評に見られるような記号論的回付構造に特化した解釈⁽¹⁶⁾か、80年代中庸の「政治的転回」⁽¹⁷⁾以降の倫理思想やフッサールやハイデガーとの対話者・対決者としての解釈⁽¹⁸⁾が多かった。そこで本稿では、「回付構造」という初期の定式化に立ち戻り、改めて現前性の場とその存在者たちが、弁別システムとしての言語とどのように交差するのか、そのアウトラインを描くことを試みた。かくして我々は、ハイデガーの存在論的＝時間論的理論構成を、「一般化された回付構造」として読み替え、次に存在者の反覆可能性が、必然的に他の存在者との連鎖可能性を含む「世界の戯れ」を形成することを確認し、最後にその連鎖が、言語の水準においてコードやコンテクストとして意味論的単位の反覆可能性を構成するというデリダの思考の展開を辿ってきたのである。従来ほとんど注目されなかった、回付構造の存在論的局面と記号論的局面を関係付ける「回付」の概念と、形式相互の

差異を関係付ける「連鎖」の概念との重要性は指摘できたと考えている。ところで、最終節の最後で、記号論的回付を自然化して、認識論的布置の中に再び埋め込みなおす可能性を指摘しておいたが、この方向性が、デリダのテキストの中で、より具体的にモデル化されている箇所はあるのだろうか。この交差は、大抵の場合、現象学と同じく目的論的な形式をとりやすい。VPの序文で、「認識および認識論という観念は、それ自体、形而上学的であるのではないのか」(VP, p.3)と問われているのもそのためである。しかし同時に、認識という事態を前提にしなければ、およそ物事を語ることもできないのも事実である。デリダ自身が、留保を置きながらも、非言語層と言語層の絡み合いを認識論的に論じている局面はあるのだろうか。少なくともMP所収の「形式と意義作用」において、そのような記述が垣間見られる。フッサールは、第1巻第124節「“ロゴス”のノエシス・ノエマ的層。意義作用と意義」において、非表現層の意味から表現層の意義が構成される局面を記述しているが、彼自身が自覚的である通り、「表現は、下位の志向層に対して新たな志向的諸機能を及ぼす精神的形成であって、そしてこの精神的形成は、相関的に、その下位の志向層から諸々の志向的機能を被る」(MP, p.190) ような「織り合わせり (Verwebung)」(MP, p.191) をなしている。フッサールにおいて、経験のノエマ的意味とは、あらかじめ意義作用の中に刻印可能な素質をすでに持ち、意義の中で形式的標記を受け取らねばならないようなもの、つまりデリダの言葉でいえば、「意味とはすでにして、当該の意義作用において重複される一種の白くて無音のエクリチュールである」(MP, p.197) とされている。ここで彼は、経験的「意味」の再生産としての言語的「意義」というフッサールの記述に関して次のように指摘する。

もしも諸概念の(…)或る独自の歴史と独自の永続性が存在するとすれば、それらの概念は常に意味よりも古く、それらは一つのテキストを構成していることになる。なんらかのテキスト的処女性が、かの時に、意味の最初の産出を受け入れたのだと、たとえ権利上ではそのように想定しえたとしても、事実上は、意義作用のシステムの秩序がなんらかの仕方ですべての方向を意味に課しているということにどうしてもならざるをえない。その秩序が自らの形式を意味に命じ、統語論的規則であろうとその他の規則であろうと、とにかく何らかの規則にしたがって、意味が自らを刻印

するように強制するというにどうしてもならざるをえない。(MP, p.197)

これは、単なる偶然的事実ではなく、「我々は権利上の超越論的諸問題を立てるためには、括弧に括るわけにはいかない」事実性である。経験のノエマの意味が、単に時間化によって痕跡としての経験を構成しているというだけではなく、またノエマの意味がそのまま反復可能な痕跡となって概念的な意義に到達するというだけではない。そうした垂直の回付構造の目的論的性格が問題になっているのではない。そのこと自体はフッサールも自覚的だからこそ「織り合さり」と呼んだのである。むしろここで重要なのは、そういう垂直の目的論的連関さえ成立しない、そこで事後性を云々するだけでは済まない、ということである。デリダが指摘するように、「言説の横糸が(…)実際にはその横糸より先に存在していたわけではないある縦糸(chaine)の替わりにな」(MP, p.191)らざるをえない。表現層が、言語の大小さまざまな単位が織り成す回付構造の形式をとる以上、ノエマの意味は、縦糸の差延だけでなく横糸の差延をも被る(横糸と縦糸のこの交差を考慮すれば、物理と心理を架橋する法則を打ち立てるのは、ほとんど不可能なことだと言うことにもなろう)。これは、各人が使用する言語が思考や認識を規定すると言った表面的なことではない。そもそも思考というものの自体が、各人が使用可能な言語という下部構造の諸可能性から導き出されたものだという意味で、思考もまた、表現層の「テキスト」なのである。従って、非表現層は単に経験の側にあるだけではなく、経験の主体である我々の意思や意図の側にもあり、それもまた縦糸と横糸の交差の中で反復可能な形式を受け取る白いエクリチュールの形をとらざるをえないと思われる。こうしたモデルについては稿を改めてより詳細に論じる予定である。

本稿で参照したデリダの著作とその略号。

GR=*De la Grammatologie*, Collection Critique, Paris, Minuit, 1967 ; **VP**=*La voix et le phénomène*, Paris, PUF, 1967 ; **MP**=*Marges de la philosophie*, Paris, Éditions de minuit, 1972 ; **PO**=*Positions*, Éditions de Minuit, 1972 ; **ED**=*L'écriture et la*

différence, Paris, Éditions du Seuil, 1979 ; **GL**=*Glas*, Denoël/Gonthier, Paris, 1981 ; **PG**=*Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, Paris, PUF, 1990 ; **PS1**=*Psyché : Invention de l'autre* (nouvelle édition augmentée), Paris, Éditions Galilée, 1998 ; **SM**=*Spectre de Marx*, Paris, Galilée, 1993 ; **MA**=*Le monolinguisme de l'autre*, Paris, Galilée, 1996 ; **OG**=*L'Origine de la géométrie*, E. Husserl, préfacé par Jacques Derrida, Paris, PUF, 1999 ; **DI**=*La Dissémination*, Paris, Éditions du Seuil, 1993, [Points Essais]; **LA**=『他者の言語』(*La Langue de l'autre*)、東京、法政大学出版局、1989年。

注

- (1) これは、Rodolphe Gasché、デリダの痕跡やエクリチュールといった用語で言わんとする内容を一般的に名指すのに用いる言葉である。Cf. *Le tain du miroir*, trad. par Marc Froment-Meurice, Paris, Galilée, 1995. ただし、元々はデリダのテキストに由来し、「下部構造的な意味でのテキスト」(GR, p.234) などという形で用いられている。
- (2) 今日、フッサール現象学がこうした枠組みに容易に収まるものでないことはよく指摘される。筆者の知るかぎり、1908年夏学期の講義『意味教説講義』(*Vorlesungen über Bedeutungslehre*, Dordrecht-Boston, M. Nijhoff, 1987) では、文法性がイデア性の保証となっている制約はあるものの、彼なりの「文脈原理」が考慮されているし、またその「補遺」(1911) では、経験的意味の不決定性が論じられている。『論研』と『イデアン』の間の言語観の変転については、例えば次の著作を参照。Jocelyn Benosit, *Entre actes et sens*, Paris, Vrin, 2002. いずれにせよ、テキストは一枚岩ではないことを再三主張しているデリダにとって、その後のフッサール研究において彼の批判が一定程度乗り越えられることはむしろ喜ぶべきことでもあろう。
- (3) Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, Tübingen, Max Niemeyer, 1969, p.23.
- (4) デリダとハイデガーの詳細な比較は、次の論文を参照。「デリダにおける時間のアポリア」、藤本一勇、『情況』、1998年10月号(特集「デリダと政治的なもの」)、142-163頁。
- (5) 本稿ではもっぱらハイデガーに引き寄せてデリダの時間論を考察しているが、この語自体レヴィナス経由であり、レヴィナスの影響も軽視できない。Cf. Paola Marrati-Guénon, *La genèse et la trace : Derrida lecteur de Husserl et Heidegger*, Dordrecht et Boston, Kluwer Academic Publishers, 1998, p.143-164.
- (6) ただし、この回付構造が、存在の贈与以前の水準で、指標の複数性を前提す

るわけではない。立て続けに生じる贈与の運動が、現前者を現前せしめるような効果を与えること、贈与のこの絶え間ない先送りの運動を、回付構造と見なしている。

- (7) 記号論の存在論化が逢着する隘路に関しては次の文献が手厳しい。Thierry Simonelli, *Lacan la théorie*, Paris, Cerf, 2000.
- (8) 「世界という戯れ」に関してデリダは、フィンクやアクセロスの著作の他に、ハイデガーのプレーメン講演「物」や著作『根拠律』について言及している。ハイデガーの言う「世界という戯れ」は、「四方域 (Geviert)」の4項が相互作用によって「存在」の運動を生じさせるものであり、ハイデガー流の「回付構造」でもある。デリダは、DI所収のソレルス論「ディセミナシオン」において、「四方域」を散種の議論に接続している (DI, p.429-431)
- (9) この点についてのデリダの記述は曖昧だが、「ヒュレー／モルフェー構造」という言葉で、ノエイス／ノエマ構造を含めて語っているか、『時間講義』や『受動的総合の分析』や未完の草稿で深められたヒュレー概念を念頭においているかであろう。後者に関しては、OG, p.83やED, p.241-242を参照。
- (10) のちに「痕跡」のモチーフを「亡霊」として再定式化したデリダは、SMにおいて次のように書いている。「(…)我々は、次のことだけを、その方向をここではあまり進みすぎずに、示唆するだけにとどめよう。すなわち、あらゆる亡霊性の根本的な可能性は、意表をつくがかしきっぱりとしたやり方で、現象学的体験の志向的ではあるが〈非実的〉な構成要素すなわち〈ノエマ〉として、フッサールが同定するものの方向性において研究されるべきであろう。二つの相關関係 (ノエシス／ノエマ、ヒュレー／モルフェー) の他の三つの項 [つまりノエシス、ヒュレー、モルフェー] とは異なり、ノエマの相關者のこの非一実的性質、志向的ではあるが非実的なこの志向的包含は、世界の「中」にも意識の「中」にもない」(SM, p.215)。
- (11) R. Beardsworthは、「かくして「聴覚映像」のソーシャル的理解はデリダによって先鋭化され、刻跡は、伝統的な哲学分析にも、他の分析、例えば、哲学の根源的な超越論的推進力に取って代わらんとする言語学者たちの分析にも、還元不可能であるというこの不可能性を位置づけなおす」と指摘している。Cf. *Derrida & the Political*, London and New York, Routledge, 1996, p.16.
- (12) この見解は単にマラルメのテキストにのみ当てはまることではない。その点については拙稿を参照。「差延を営む“シンタックス職人”」、Azur、第6号、77-96頁。
- (13) 例えばGaschéはテキストの下部構造としての差延について次のように結論している。「フッサールにおいては、意味がその検証以前に持つ本質の原初的な諸法

則が、意味の単位に関するあらゆる法則であり、そうして共陳述辞や統語論的なものに対して意味論的なものに優先権を付与するのに対して、下部構造は、自足的名辞と共陳述辞の差異、意味論的なものと統語論的なものとの差異などを疑義に呈する」(Op. Cit., p.236)。

- (14) 近年研究成果が目覚ましい文法化の現象については、例えば『文法化』(ホッパー & トラウゴット著、九州大学出版会、2003年)を参照のこと。
- (15) 散種と多義性の決定的な相違は、多義性が計算可能な単位の複数性に関わるのに対して、散種は、一つの単位そのものの可能性と不可能性に関わる点にある。『他者の単一言語使用』によれば、散種とは「唯一性 (unicité) の経験」であり、「かつて散種の思考が (...) において自らを呈示したのは (...) 複数的なるものの思考としてではなく、まさしく唯一なるものの思考として」(MA, p.49)である。
- (16) 英米哲学と大陸哲学とのエキューメニズムとでも言うべき立場を早くから採っていたサミュエル・ウィーラーもまた、デリダの「言語的脱差延」をホーリズムの観点からしか捉えていない。Cf. Samuel, C Wheeler III, *Deconstruction as Analytic Philosophy*, Stanford, Stanford University Press, 2000.これは恐らく後期ヴィトゲンシュタインの観点からデリダを読む論客たちに対しても当てはまる。1999年にイギリスで開かれた講演会で、ヴィトゲンシュタインの『哲学探究』第一部第一節の買い物場面に関してデリダは次のように語っている。「私にとってこの描写が目しているのは、我々の心的動作の中に、反覆可能性によって、ある種の“技術”が設置されてある様子です」(*Arguing with Derrida*, edited by Simon Glendinning, Oxford, Blackwell, 2001, p.117)。つまりヴィトゲンシュタインの分析は記号論的回付の人為的作動の局面に定位しており、回付の運動そのものまでは論じていないのである。
- (17) Jacob Rogozynskiは、近年、「寛容さの転回」という言葉で同じ事態を指摘している。Cf. *Faire part*, Paris, Léo Scheer, 2005.
- (18) 例えば藤本一勇氏は次のように述べる時、アプローチの違いもあるにせよ、存在論的回付と記号論的回付の関係があまり意識されていないように思われる。「記号作用がやはり現前的作用である以上、現前性の贈与運動そのものの「死」こそが記号作用における「死」を誘導していたというべきだろう。これら二つの「死」は同じ一つの事柄の表裏である」(「デリダの奇妙な“自伝”」、早稲田フランス語フランス文学論集、2000年、153頁)。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第7号(2006年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html